

六〇、『徹選抄』七・一二二―一二三、以上のような箇所がある。最後に第四の共通点として、二師共『十住論』原文に説かれるような、易行道が聖道門内の方便道として説かれているとか、難行道の下に易行道が位置づけられているという理解はせず、難行道と易行道とを同等なものとして並列的に扱った上で、易行道の方が難行道よりも勝れているという立場に立っている点(弁長『徹選抄』七・九三、『名目問答』十・四〇五―四〇七、『浄土宗要集』十・二二六。良忠『決疑鈔』七・二〇九―二一〇、『論註記』一・二六〇―二六一、『浄土大意鈔』十・七一三―七二五)がある。これは『論註』に説かれる難易二道判を、『十住論』に遡って解釈する二師にとり自然な立場である。

平安期の仏教説話集と〈贈与論〉

——『注好選』を中心に——

稲城正己

大乘仏教の実践の特質である〈利他行〉を、近年再評価されるようになった〈贈与論〉の視点から捉え直してみる、それが本発表の目的である。〈贈与論〉は、マルセル・モースやカール・ポランニーの理論がよく知られているが、〈贈与論〉が再評価されるようになったのは、近年顕在化してきた世界的規模での環境破壊や経済的破綻からの脱却に示唆を与えてくれると考えられるようになったからである。しかし彼らは、〈贈与〉を社会の構成原理としてしか見ていない。一方、今村仁司は、

人間存在の根源には自己の存在を〈贈与〉されたものとする感覚があり、その「負い目」の感覚が、自己の生命や身体を不特定の相手に〈贈与〉するふるまい(自己贈与)を喚起するのだという。しかし、人間が存在し続けるためには、自己の生命のすべてを〈贈与〉することは不可能である。自己の生命を分割して〈贈与〉すること、生命を労働によって産み出される〈モノ〉に転化して「負い目」を返済することが生きるということになる。仏教では前者を〈捨身〉といい、後者を〈布施〉と呼ぶ。これらは、仏教テクストのなかで釈迦菩薩の本生譚として叙述されているが、日本の仏教説話集のなかでは、どのように描写されているのか。この問題について、一一世紀末―一二世紀初頭の成立とされる『注好選』を素材として考えてみたい。

『注好選』三巻は、上巻が宇宙創生神話・中国の聖なる王の登場と事物の起源・学問と立身・儒教的な孝子譚、中巻が釈尊の本生譚・釈尊在世中の靈驗・仏滅後の弟子の行動、下巻が動物のアレゴリーという特異な構成をもつ。上巻には儒教的な〈自己贈与〉が、孝子の〈自死〉として叙述されているが、父や自分を死に追いやったものに復讐するための〈自死〉も見られる。〈自己贈与〉が社会化・制度化されると、自己の生命を犠牲にして他人の生命を奪う復讐を招くことになる。それは、〈自己贈与〉が義務化されると、自己と他人の生命の〈交換〉へと変質することを意味している。孝子譚に先行する王の出現と善政に関する第三―一六話は、一見、仏教とは何の関係もないように見える。だが、人間の安穩のために社会や制度が作られたにもかかわらず、それが人間間の闘争を惹起するという世

俗世界のパラドクスが生じる理由を明らかにするために必要なのである。

中巻第三話・第九話は、それぞれ『法華経』『提婆達多品』『薬王菩薩本事品』からの引用で、前者は、釈迦菩薩が阿私仙の「奴僕」となって『法華経』を授けられるという本生譚である。後者は、薬王菩薩が自らの身体を燃やして日月淨明德仏を供養するという物語である。ともに、衆生を救うための法を求めて〈自己贈与〉をするという〈捨身〉の物語である。第一一話と第一二話は、ともに自己の生命を賭けた〈布施〉の物語である。生命を分割し、モノに転換して〈贈与〉する〈布施〉も、「信」が備われれば〈自己贈与〉に劣らないことを物語ろうとする説話である。

下巻第二二話と第二三話は、鶴と鹿が自己の生命を賭して子を守る〈自己贈与〉の物語である。下巻には、聞法する鼠や鸚鵡、布施をする猿、経典を運ぶ牛といった、動物が仏道修行をして往生する物語が多い。これらは、動物でさえこれだけのことができるのだから、まして人間は努力して仏道修行に励むべきであるというアレゴリーの物語である。とはいえ、動物は忉利天や四天王天に往生しても、諸仏の浄土に往生することはない。そこに人間と動物との分節線が引かれている。

以上のように『注好選』は、社会や制度の創生神話・儒教的な孝子譚・動物のアレゴリーといった世俗世界の〈贈与〉と、〈捨身〉や〈布施〉といった仏教的な〈贈与〉とを比較することによって、大乘仏教の根源について物語ろうとするテキストなのである。

『西方発心集』の思想と表現

龍口恭子

『西方発心集』は、法然上人全集（明治三十九年刊）には「附録」に収められ、昭和法然上人全集（昭和三〇年刊）には「第八輯 伝法然書篇」に収められている。しかし既に江戸時代から、文雄の『蓮門経籍録』には「偽妄濫真類」に収められ、泰巖の『蔵外法要菽麦私記』に「偽作」と断ずる等、法然の作という点は疑問視されて来た。一方、真宗高田専修寺に蔵される『西方発心集』が、慶安元年（一六四六）版本と同じ内容であり、書写の筆跡は室町時代の真慧と認められるが、さらに納入袋の筆跡から、顕智の書写の跡が伺えることが専修寺本の影印本公刊と共に明らかにされた。顕智が関わったということから『西方発心集』の成立は少なくとも顕智以前に遡り得る。本論では、本書がどのような立場の人によって書かれたか、思想内容は如何なるものであるか、また表現においてどのような特色を有するものであるか等について検討してみたい。

本書は上下二巻から成り、上巻には、念仏三昧が末世において善悪共に引損する四十八願の根元であると称揚する。しかるに口には名号を称えながら、心は五塵に染み、外には遁世の相を示しながら、内には名聞の望みを断ちきれない、この「心」について、筆者は法然の教示に沿いながら冷静に分析し、十二の問答によってそれを説き明かす。また下巻でも、上巻同様十二の問答を設け、本願の文の丁寧な解説を試みている。